第22号

奈良国立博物館だより

平成9年　7・8・9月

〔写真説明〕
復元模造 阿修羅立像
脱活乾漆造　彩色
像高153.4cm
天平6年(734)に造られた興福寺の阿修羅像を、造像当時の制作技法を用いて、ほぼ制作当時の姿に復元したもの。文化庁の指導のもと、財団法人美術院により、昭和56年から5年間をかけて制作された。鮮やかな彩色が私たちの意表をつく。
奈良国立博物館蔵

親と子のギャラリー
「阿修羅との出会い」
7月29日(火)～8月24日(日)　新館
後援：奈良県教育委員会

平常展
「仏教美術の名品」
6月21日(土)～10月5日(日)　新館

月曜日休館
午前9時～午後4時30分(入館は午後4時まで)
金曜日は午後8時まで開館(入館は午後7時30分まで)

親と子のギャラリー

「阿修羅（あしゅら）との出会（であ）い」

7月29日(火)～8月24日(日)　新館

第21回全国高等学校総合文化祭の開催にあわせて

興福寺の阿修羅像はもっとも人気のある仏像といってよいでしょう。じっと前を見つめる思いつめた少女のような正面の顔。向かって左の顔は、眉間にしわを寄せ、下唇をかんでいます。合掌し、宙に浮き、天（日月）を支える6本の細い手。一度見たら、決して忘れることができない不思議な魅力をもっています。この阿修羅像は、天平6年（734）に光明皇后が亡き母のために建てた興福寺西金堂に安置されていたものです。西金堂の本尊は釈迦如来。そのまわりには、約30体の仏像が置かれていました。阿修羅像はそのうちの1体で、向かって左奥に立っていたようです。

では、阿修羅とは何者なのでしょうか。

阿修羅は戦いの神です。帝釈天と死闘を繰りひろげる悪神です。やがて仏教に出会い、釈迦如来の教えを受け、仏教を護る八部衆のひとりになりました。興福寺の阿修羅像は、八部衆像の1体として制作されたものです。西金堂は何度も焼けましたが、八部衆像は阿修羅像を含む8体とも助け出され、十大弟子像6体とともに、今に伝わっています。

仏教では、生は1回きりのものではなくて、私たちは6つの世界（六道）を永遠にめぐり続けると考えます。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道。このうち修羅が阿修羅の世界です。この世界の住人はいつも戦っています。「修羅場(しゅらば)」という言葉があります。激しい闘争の場所のこと。これが阿修羅の世界です。

興福寺の阿修羅像には、戦う悪神としての姿は感じられません。

◉阿修羅立像（妙法院）
〈鎌倉時代〉
撮影：飛鳥園

さて、このたび文化庁から奈良国立博物館へ、興福寺の阿修羅像の復元模造**〈表紙写真〉**が管理換になりました。天平時代の姿を甦らせた青い瞳の真っ赤な像を見れば、誰もが驚くことでしょう。

この復元模造のお披露めを兼ねて、「阿修羅との出会い」が企画されました。

興福寺の阿修羅像の復元模造を中心に、興福寺西金堂の諸像が並びます。天平時代に制作されたこれらの像は、乾漆という技法で作られています。あの阿修羅像の微妙な表情は、乾漆像ならではのものです。もうひとつの中心は、妙法院（三十三間堂）の阿修羅像**〈写真〉**。鎌倉時代の木彫像です。その激しい忿怒の表情は興福寺の像とは対照的で、戦いの神としての性格をよく残しています。また奈良時代と鎌倉時代の彫刻の違い、乾漆と木彫の違いなども、あわせて御覧いただきたいと思います。このほか六道絵のうちの阿修羅道の絵に見られる戦いの場面、釈迦の臨終の場面で涙を流す阿修羅の姿など、阿修羅を描いた名品を通して、阿修羅について理解を深めていただける初めての機会となりました。

【主な出陳品】

阿修羅像（模造／原像は国宝）	1軀	昭和時代	奈良国立博物館
緊那羅立像（国宝／八部衆像のうち）	1軀	奈良時代	興福寺
舎利弗立像（国宝／十大第子像のうち）	1軀	奈良時代	興福寺
目犍連立像（国宝／十大第子像のうち）	1軀	奈良時代	興福寺
興福寺曼荼羅（重要文化財）	1幅	平安時代	京都国立博物館
造仏所作物帳断簡	1幅	奈良時代	奈良国立博物館
阿修羅面（重要文化財）	1面	平安時代	法隆寺
阿修羅面	1面	鎌倉時代	東寺
仏涅槃図（重要文化財）	1幅	鎌倉時代	剣神社
阿修羅立像（国宝）	1軀	鎌倉時代	妙法院
千手観音立像（重要文化財）	1軀	鎌倉時代	妙法院
北野天神縁起（模本／原本は国宝）	1巻	明治時代	北野天満宮
六道絵・阿修羅道（国宝）	1幅	鎌倉時代	聖衆来迎寺
六道絵・阿修羅道（重要文化財）	1幅	南宋時代	新知恩院

8月1日(金)～24日(日)は、毎日4回（10：00～、11：00～、14：00～、15：00～）陳列室にて解説をいたします。　＊月曜日は休館

平常展「仏教美術の名品」　主な展示品

新　館

七月

八月

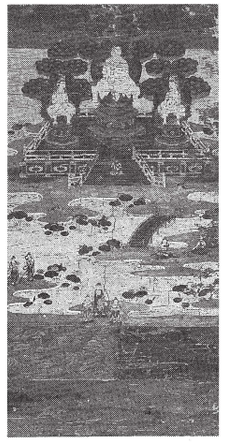
九月

彫　刻

◎銅造誕生釈迦仏立像(正眼寺)、◎銅造誕生釈迦仏立像(悟真寺)、◉銅造誕生釈迦仏立像・灌仏盤(東大寺)、◎木造釈迦如来坐像(法隆寺)、◎銅造薬師如来立像(般若寺)、木造阿弥陀如来立像、木造阿弥陀三尊像(峰定寺)、◎木造阿弥陀如来坐像(安楽寿院)、◎銅造菩薩立像(法起寺)、◎木造菩薩立像(金竜寺)◎銅造弥勒菩薩半跏像(神野寺)、◎木造勢至菩薩立像〈六観音のうち〉(法隆寺)、◎木造十一面観音立像(松尾寺)、◎木造馬頭観音立像(浄瑠璃寺)、◎木造准胝観音立像(常盤山文庫)、◎木造地蔵菩薩立像(東大寺)、◎木造地蔵菩薩立像(春覚寺)、◎木造不動明王坐像(正寿院)、◎木造不動明王坐像(園城寺)、銅造不動明王立像(天ケ瀬組)、◎木造十二神将立像(室生寺)、木造大黒天立像(西大寺)、◎木造伎楽面(東大寺)、◎木造舞楽面(手向山神社)、◎木造行道面(浄土寺)、◎木造飛天(興福寺)、木造愛染明王坐像(当館)[7月29日～10月5日]**〈写真〉**、◎木造閻魔王倚像(金剛山寺)、銅造釈迦如来立像(光明寺)

木造愛染明王坐像（当館）

絵　画



絹本著色二河白道図（薬師寺）

7月1日(火)～7月27日(日)
◎絹本著色阿弥陀五尊像(一乗寺)、◎絹本著色四十九体化仏阿弥陀来迎図(光明寺)、絹本著色二河白道図(薬師寺)**〈写真〉**、◎絹本著色矢田地蔵縁起(金剛山寺)、◎絹本著色当麻曼荼羅縁起(当麻寺)、紙本著色矢田地蔵縁起(当館)、絹本著色両界曼荼羅(当館)、◎絹本著色一字金輪曼荼羅(南法華寺)、◎絹本著色十一面観音像(金心寺)、◎絹本著色地蔵菩薩像(知恩院)、絹本著色十二天像(当館)、絹本著色善女竜王像(大通寺)、絹本著色十六羅漢像(建仁寺)、絹本著色十六羅漢図(宝厳寺)、◎紙本着色当麻寺縁起(当麻寺)

7月29日(火)～8月24日(日)
絹本著色法華曼荼羅(当館)、◎絹本著色当麻曼荼羅(長谷寺)、◎絹本著色九品来迎図(瀧上寺)、絹本著色弥勒来迎図、◎紙本白描覚禅抄〈弥勒菩薩・閻魔天〉(勧修寺)、◎絹本著色十王図(永源寺)、◎絹本著色十王図(二尊院)、◎絹本著色春日浄土曼荼羅(能満院)、絹本著色春日曼荼羅(当館)、紙本著色伊勢曼荼羅(正暦寺)、絹本著色熊野曼荼羅(聖護院)、絹本著色吉野曼荼羅(西大寺)、絹本著色多武峯曼荼羅(当館)

8月26日(火)～10月5日(日)
絹本著色釈迦五尊十羅刹女像、絹本著色普賢十羅刹女像、絹本著色当麻曼荼羅、絹本著色山越阿弥陀像、絹本著色法華曼荼羅、絹本著色法華曼荼羅、紙本墨画理趣経曼荼羅、絹本著色両界曼荼羅、絹本著色如意輪観音像、絹本著色十一面観音像、絹本著色文殊菩薩像、絹本著色普賢菩薩像、絹本著色愛染明王像、絹本著色真言八祖像(以上当館)

書　跡

7月1日(火)～7月27日(日)
◉紫紙金字金光明最勝王経、紫紙金字法華経、不空羂索毘盧舎那大灌頂光真言〈中尊寺経〉、大智度論巻第四十七〈神護寺経〉、大般若経巻第百五十七(東大寺八幡経)、大般若経巻第四百二〈源豪一筆経〉、叡山拝堂記、毘尼母経巻第五〈足利尊氏願経〉、版本大般若経巻第三百六十五(以上当館)

◉法華経序品〈竹生島経〉（宝厳寺）

7月29日(火)～8月24日(日)
◉一字蓮台法華経(龍興寺)、◉法華経序品〈竹生島経〉(宝厳寺)**〈写真〉**、紺紙金字法華経(興聖寺)、◉上宮聖徳法王帝説(知恩院)、◉泉涌寺勧縁疏(泉涌寺)、◎大福田寺勧進状(大福田寺)

8月26日(火)～10月5日(日)
◉金光明最勝王経〈百済豊虫願経〉(西大寺)、大悲経巻第二〈五月一日経〉(正暦寺)、◉無量義経(長谷寺)、悉曇字母釈(当館)、不動護摩次第(当館)、◎感身学正記(西大寺)、浄蔵法師伝(当館)

工　芸

模造玉虫厨子(セゾン現代美術館)[～7月27日]、◎金銅火焔宝珠形舎利容器(海龍王寺)、◉金銅透彫舎利容器及内容器(西大寺)、◎黒漆密観宝珠嵌装舎利厨子(般若寺)[～7月27日]、◎黒漆密観宝珠嵌装舎利厨子[～7月27日]、四方殿舎利厨子(能満院)[～7月27日]、◉黒漆経箱(中尊寺)[～7月27日]、◎金銅宝相華文透彫経筒(万徳寺)、散蓮華蝶文螺鈿卓(当館)[～7月27日/8月26日～10月5日]、◎銅草花文磬(峰定寺)、◉金銅迦陵頻伽文華鬘(中尊寺金色院)、◎金銅種子華鬘(当館)、金銅種子華鬘(当館)[～7月27日]、◎金銅蓮華文透彫華鬘(神照寺)[～7月27日]、金銅輪宝羯磨文透彫幡、竹製花籠(性海寺)、◎紙胎彩色華籠(万徳寺)、◉金銅宝相華文透彫華籠(神照寺)、金山寺香炉(当館)[～7月27日]、金銅柄香炉(高山寺)[～7月27日]、◉金銅密教法具(厳島神社)、◎金銅五鈷鈴(当館)、◎金銅五鈷四天王鈴(弥谷寺)、金銅五鈷三昧耶鈴(金峯山寺)、◎金銅独鈷杵(当館)、◎銅鰐口(長谷寺)[～8月24日]、◎鉦鼓(東大寺)[～8月24日]、◎鉦鼓(手向山八幡宮)[～8月24日]、刺繍阿弥陀三尊来迎図(当館)[～8月24日]、十一面観音懸仏(当館)[～7月27日]、聖観音懸仏(当館)[～7月27日]、◎山王十社懸仏(当館)[～7月27日]、蔵王権現鏡像(当館)、◎阿弥陀如来鏡像(当館)、◎十二尊鏡像(細見美術財団)、◎五輪塔嵌装春日曼荼羅彩絵舎利厨子(不退寺)[7月29日～8月24日]、金銅火焔宝珠形舎利容器[8月26日～10月5日]、黒漆螺鈿経箱[7月29日～8月24日]、三脚卓(当館)[7月27日～8月24日]、◎金銅透彫尾長鳥唐草文華鬘(細見美術財団)[7月27日～8月24日]、◎金銅蓮華文透彫華鬘(神照寺)[7月29日～10月5日]、銅銀象嵌香炉〈金山寺形香炉〉(長谷寺)[8月26日～10月5日]、仙盞型水瓶(当館)[7月29日～10月5日]、◎鉄釣燈籠(当館)[8月26日～10月5日]、◎銅鐃(円福寺)[7月29日～10月5日]、◎熊野十二尊懸仏(細見美術財団)[7月29日～10月5日]、阿弥陀如来懸仏[7月29日～10月5日]、密観宝珠嵌装舎利厨子(金剛山寺)[8月26日～10月5日]、◉黒漆蒔絵経箱(長谷寺)[8月26日～10月5日]、◎木製彩色華鬘(霊山寺)[8月26日～10月5日]、◎金銅宝相華文線刻蓮華形磬(赤松院)[8月26日～10月5日]、◎銅草花文磬(峰定寺)[8月26日～10月5日]、◎銅蓮華形磬[8月26日～10月5日]、銅素文磬(当館)[8月26日～10月5日]、銅孔雀文磬(当館)[8月26日～10月5日]、刺繍種子阿弥陀三尊像(大福田寺)[8月26日～10月5日]

考　古

◉三重・朝熊山経ヶ峯経塚出土品〈銅経筒・銅鏡〉(金剛証寺)、◎伝福岡県出土銅経筒・滑石外筒、和歌山・粉河経塚出土遺物、銅経筒〈平治元年銘〉、飛鳥文陶製外筒(当館)**〈写真〉**、◎伝福岡県出土経塚遺物(以上当館)

飛鳥文陶製外筒（当館）

親と子のギャラリー
「阿修羅との出会い」
7月29日(火)～8月24日(日)
後援：奈良県教育委員会

月曜日休館
午前9時～午後4時30分
金曜日は夜間開館　午後8時まで

◆観覧料金

（　）内は20名以上の団体料金

大人	420円	(210円)
高校・大学生	130円	(70円)
小・中学生	70円	(40円)

無料観覧日
8月15日(金)

高校生無料
8月5日(火)～8月13日(水)

小・中学生無料
8月9日(土)・8月23日(土)

◉国宝、◎重要文化財。展示品は都合により一部変更する場合があります。

「奈良帝室博物館列品第一回目録」

―― 館史の落穂拾い ――

資料管理研究室長　中島　博

明治28年(1895)に開館した帝国奈良博物館は、当初皇室の御物をはじめ、帝国博物館（東京国立博物館の前身）・東京美術学校、および個人などの所蔵品の寄託を得て展示を行っていた。これらに加えて、社寺からも寄託を受けるようになったのは、当館に保存されている「社寺受託台帳」によれば、明治30年9月以降である。9月末から12月中旬にかけて、奈良の諸社寺の仏像・仏画・工芸品・書跡など多数の宝物が短期間に集中して寄託されているのは、組織的な作業のように思われるものの、その事情については記録が今のところ見当らない。明治28年の宮内省達「帝国京都、奈良博物館社寺什宝受托規則」に則るものではあるが、おそらく直接の契機として、30年6月に「古社寺保存法」が公布されたことと関連があろう。この法律によって、主として社寺に所蔵されている建造物および宝物類の維持修理のために国費を支出すべきことが定められ、その趣旨は昭和25年（1950）公布の「文化財保護法」にも継承されて、現在に及んでいる。「社寺受託品台帳」には、宝物の損傷状況も詳しく記録されているが、その文中に朱点を打って抹消した箇所があり、それに「明治三十年修繕セシニ因ル」という注記があることから、受託後ただちに、分離部の接着や欠損部の補足などの小修理が、多くの宝物に対して施されたことがわかる。この折の寄託品の一部は3年後に預かり期限を迎えると共に返還されたが、別の一部は、「古社寺保存法」に定められた、特に重要な宝物たる「国宝」に指定され、それは内務大臣の命により官立または公立の博物館に出陳しなければならないとの規定によって、命令出陳として「国宝原簿」という別の台帳に移されて恒常的な列品となり、またそれ以外の寄託品も、3年ごとの更新を繰り返しながら、当館の列品として定着していった。

明治35年3月3日に発行された『奈良帝室博物館列品第一回目録』(33年に官制改正により館名が改められた）は、四六判で197ページあり、ソフトカバーの表紙には、当時の寄託品のうち法隆寺の弥勒菩薩坐像の光背の浮彫文様を基に描いた、飛雲に鳳凰の大振りの文様を淡緑地に白抜きで表わしている。凡例に記されているとおり、館蔵品・国宝出陳品・その他の社寺寄託品・国の機関および個人の出品からなる列品を、歴史・美術・美術工芸の3部に大別し、さらに各部を細分した類別に従って、すべての列品を記載している。なお、時代を反映して、御物は別格として巻首に置かれ、天皇と皇族の手になる書画もその次に独立の一群をなす。品名・所有者に、銘文や伝説などの簡単な注記だけを付して作品を列挙した目録の後に、主要品を24点選び、単色写真図版と解説文で紹介している。

凡例には刊行の事情も記されており、それによれば、寄託出品は3年を1期とするので、目録も3年ごとに編製し、次回までは1年ごとに増加したものの追加目録を編製すると細かく規定し、本来は第1期の目録を明治30年現在の内容で刊行すべきところであったが、印刷に至らぬまま経過したため、第2期にあたる33年7月現在の目録が第1回となったという。ここから先は推測になるが、30年にはまだ、寄託品が定着するかどうか見通しが不透明で、目録の刊行にまで気運が高まらなかったのではないだろうか。それが一期を経て、返還されるものはされ、残るものは残って、ようやく列品らしさを備えるようになり、目録の公刊も自然に行い得るようになったのであろう。その意味でこの目録は、当館の陳列品の歴史上、最初の記念碑といえるもので、「第一回」と名乗るのは正当であった。恥かしいことに、当館ではこの目録の存在が長らく忘れ去られていた。当館の「出版録」というファイルには、この目録製作の伺書や、印刷・発売の請負に関する書類、配布先の記録、さらには受贈者からの礼状まで綴じ込んで保存されているのに、なぜか目録の現物は保存されなかったようなのである。いまある一冊は、実は近年古書店の目録で見出して購入したものである。日焼けして上下辺が欠けている背表紙に「奈良博物館目録」と、どなたか知れぬ旧蔵者による丁寧な墨書があり、書棚に並んでいたさまがしのばれる。文化財を愛し、ついでに博物館も愛してくださった方のおかげで、この一冊がいま私たちの前に存在する。感謝に耐えない。

ギャラリートーク

7月9日(水)「金字経と金銀字経」	普及室長　西山　厚
8月13日(水)「花にちなんだ仏教工芸品」	工芸室長　阪田　宗彦
9月10日(水)「当館所蔵の絵画について」	学芸課長　宮島　新一

午後2時より、新館陳列室にて。入館者の聴講自由。

親と子の文化財教室

平成9年度「飛鳥時代の歴史と美術（第2クール）」

主催：当館　後援：奈良県教育委員会

飛鳥時代の文化の中心は仏教です。6世紀の終わりには飛鳥寺が建立され、さらに7世紀に入ると、聖徳太子の保護もあって、仏教はとても盛んになります。当時のすぐれた仏像などは今も法隆寺に数多く伝えられています。

この「親と子の文化財教室」では、昨年まで、飛鳥→奈良→平安→鎌倉時代の歴史と美術について時代順に勉強してきました。しかし毎年、受講者が替り、講師も替り、もう一度飛鳥時代からやってほしいという要望が出るようになりました。

皆様の御要望にお応えし、「飛鳥時代の歴史と美術（第2クール）」を開催しています。

〈今後の予定〉

7月12日(土)　「飛鳥時代の工芸品」
8月9日(土)　「飛鳥時代の絵画」
9月13日(土)　「法隆寺」（現地見学）
10月11日(土)　「聖徳太子はどんな字を書いたのか」
11月8日(土)　「飛鳥時代の寺院」
12月13日(土)　「飛鳥時代が今日に語るもの」

〈対　　象〉小学5・6年生、中学生および保護者等。
〈時　　間〉午前10時から12時。
〈場　　所〉奈良国立博物館地下ホール。現地見学もあります。
〈定　　員〉100名（先着順）。
〈参 加 費〉無料（見学料金が必要な場合があります。）
〈講　　師〉奈良国立博物館研究員および学習普及専門官
〈申込方法〉往復はがき（または電話）で、住所・氏名・学校名・学年・電話番号・同伴する保護者等の氏名・実施日を記入のうえ、
〒630 奈良市登大路町50　奈良国立博物館　親と子の文化財教室係
☎0742－22－7771までお申し込みください。連続申し込みも可。

開館時間　午前9時より午後4時30分まで（入館は午後4時まで）
金曜日は午後8時まで（入館は午後7時30分まで）

休 館 日　月曜日（月曜日が祝日または振替休日の場合は開館し、翌火曜日が休館）

観覧料金　毎月第2・4土曜日は、小・中学生無料

		大　人	高・大生	小・中生
平常展	一　般	420円	130円	70円
	団　体	210円	70円	40円

（団体は責任者が引率する20名以上）
親と子のギャラリーは上記料金で観覧できます。

無料観覧日　8月15日(金)

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し返信用封筒（80円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の普及室にお申し込み下さい。

〒630 奈良市登大路町50　電話0742-22-7771 FAX0742-26-7218 テレフォンサービス0742-22-3331　**奈良国立博物館**
ホームページ〈URL〉http：//www. narahaku. go. jp/